

大野川上流域における旧石器時代の遺跡

— 上岩戸遺跡 —

橋 昌 信

1 上流域の環境と遺跡

大分県下で最大の河川をほこる大野川の上流域は阿蘇山の東麓である熊本県阿蘇郡波野村、高森町、それに大分県直入郡荻町、竹田市などが所在する。大野川の上流はこれらの地域を流れる滝水川・藤渡川・山崎川などの多く支流によって形成されている。阿蘇山の東側に展開する標高300~500mの高原台地は多くの支流によって浸蝕された深い谷がみられ、いたるところに開析の進んだ複雑な舌状台地が東西に細長くひらけている。

大野川上流域の荻地区は昭和51年度より農業整備に伴う調査が開始され、今日まで継続的に実施されている。この調査によって荻町の台地上には縄文時代から弥生時代にかけての遺跡が数多く存在することが明らかにされ、歴大な資料を得ている。

たとえば、縄文時代の遺跡としては、早期・前期の中行年、寺の前、右京、桑木下原、仏面など、晩期の浦久保、横迫などの諸遺跡がある。弥生時代の遺跡は古賀、政所西、北原、それに上岩戸遺跡に近接する中山など、特に大規模な集落が知られている。

一方、旧石器時代の遺跡の発見・調査例は乏しい。これは阿蘇に近い上流域の台地では阿蘇をはじめとする火山起源の降下堆積物が地上を厚く覆っているためであろう。大野川上流域で旧石器時代の遺物が発見されているのは、竹田市のネギノ遺跡・小園遺跡、荻町の寺ノ前遺跡・

谷尻原遺跡・北原西遺跡・政所馬渡遺跡、それに上岩戸遺跡ぐらいである。このうち、政所馬渡は昭和51年の発掘調査で、細石器文化の包含層が確認され、数量は少ないが細石刃・細石核などが出土している。ネギノ遺跡ではナイフ形石器が1点、小園・寺ノ寺・谷尻原・北原西の各遺跡では流紋岩製の剝片などが採集されているだけである。

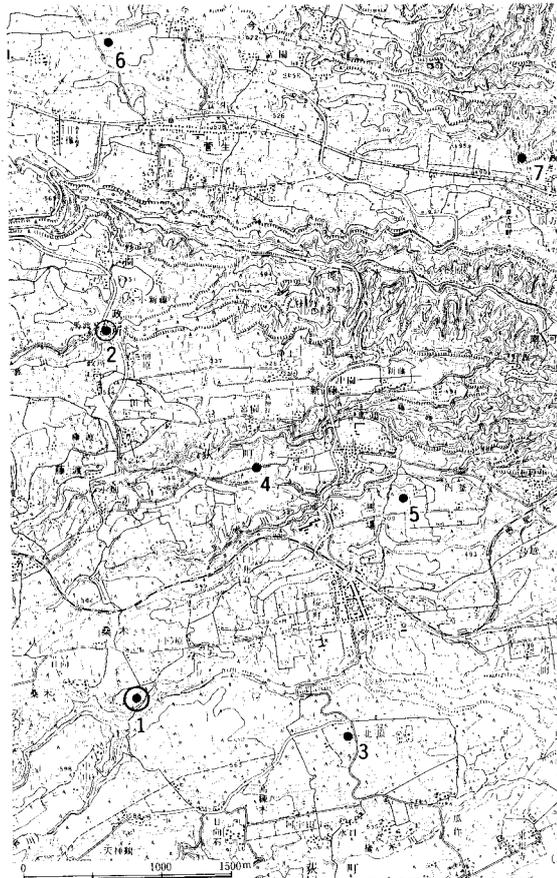
2 上岩戸遺跡とその地層

直入郡荻町大字桑木字上岩戸に所在している。この遺跡は昭和40年代の中頃、荻町在住の山村高啓氏によって注意されたのが最初である。上岩戸の農道拡幅の工事の崖面の切り通しにおいて10数点の石器類を採集したのである。

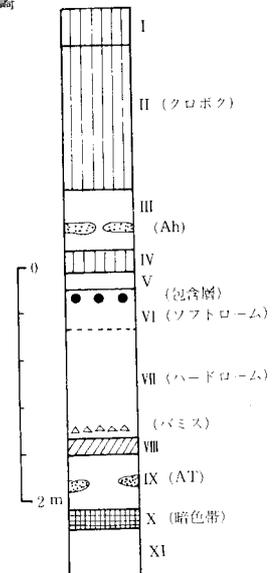
遺跡は大野川上流の1つの支流である山崎川が、さらに中山川の小支流に分岐する地点の北東1.5km、桑木から南へ向って開けている台地の末端近くにあり、標高は約520mである。

昭和56年、大野川上流域の分布調査を実施した際、山村氏によって採集された道路の東の台地末端に近い原野と畑の境界である切り通しの地層断面で、細石核、細石刃、剝片などを新たに発見したのである。この地点を第2地点、道路の方を第1地点と仮称しておく。両地点は直線距離にして130~140m離れている。

2つの地点の出土遺物がすべて同じ一つの文化層の所産であるかどうかについては、両者の中間地点や第1地点の出土層位が不明なため定



第1図 上岩戸遺跡と周辺の旧石器時代遺跡
 1 上岩戸遺跡, 2 政所馬渡遺跡, 4 寺ノ前遺跡,
 5 谷尻原遺跡, 6 ネギノ遺跡, 7 小園遺跡



第2図 上岩戸遺跡土層模式柱状図

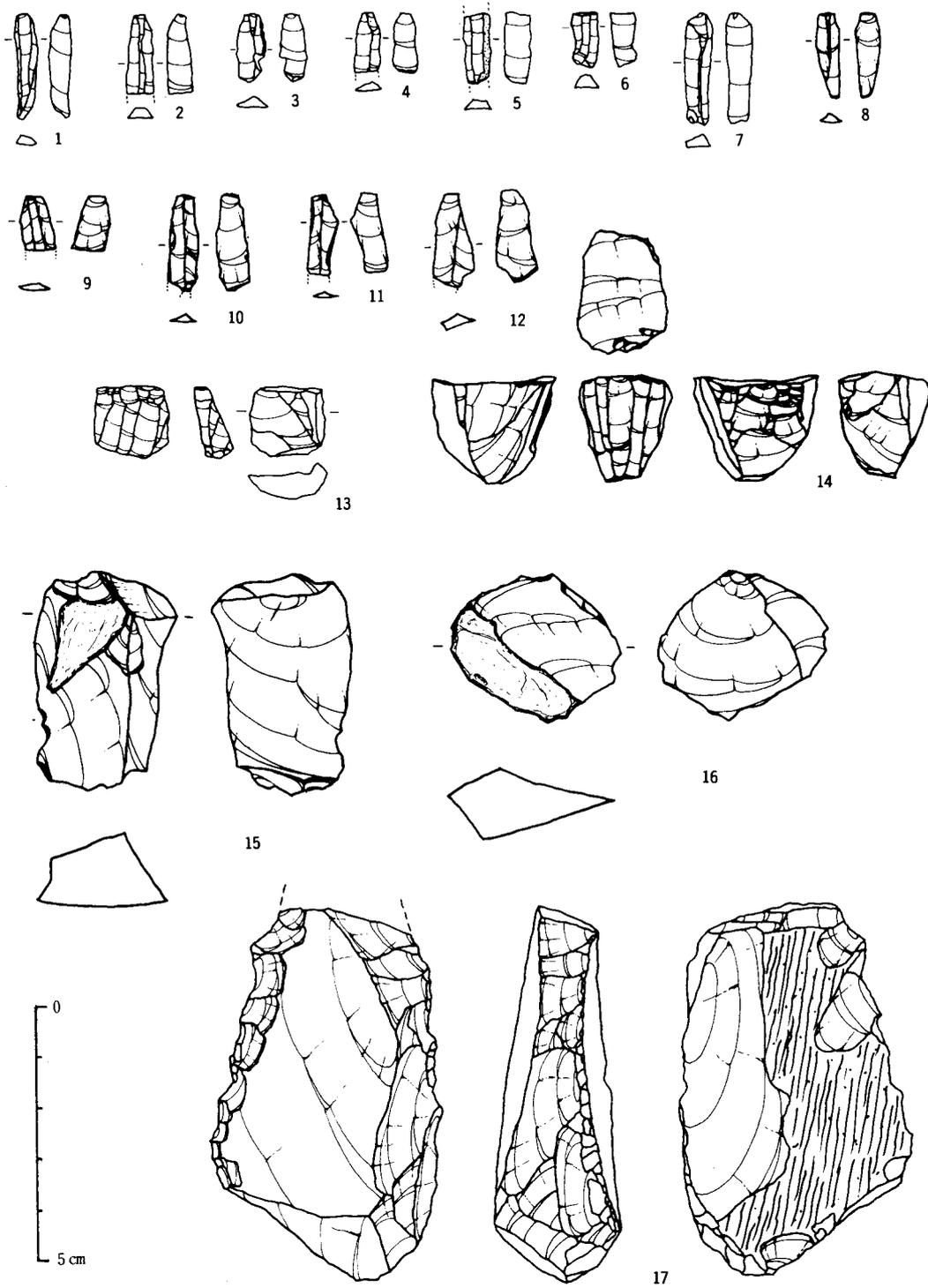
かでない。しかし、採集されている石器群から判断する限り、単一の時期の1つの遺跡で、おのおのブロックの状況を示唆しているように考えられよう。

地層 上岩戸遺跡の土層の堆積状況は今回の踏査で発見した第2地点の切り通し断面において観察できた。

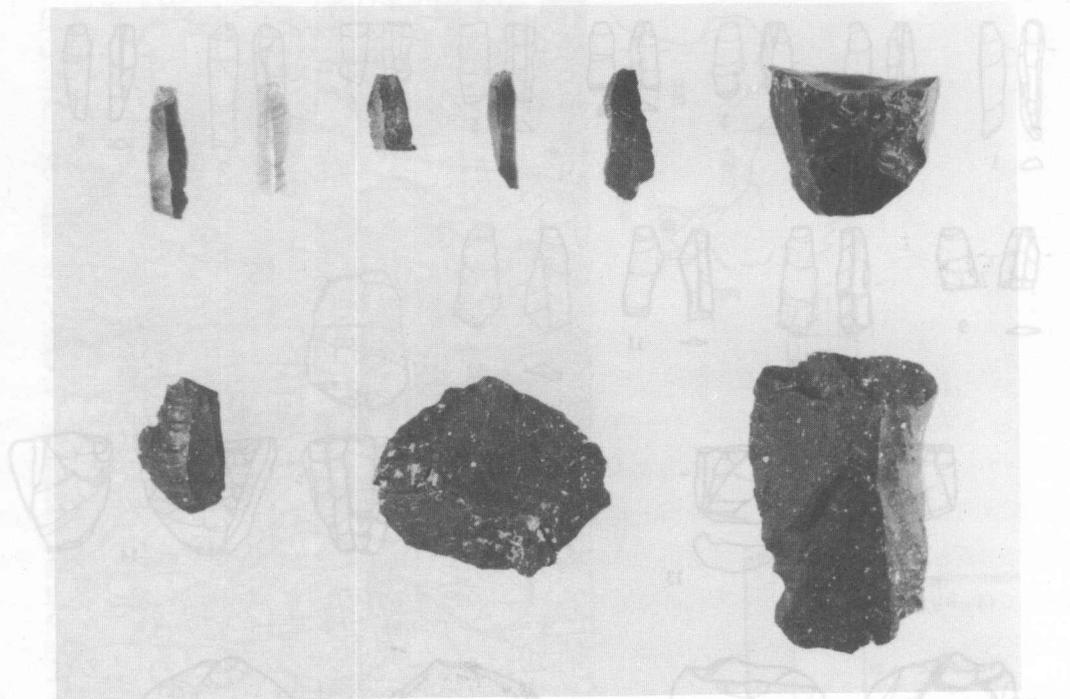
第I層は20cm前後の厚さの黒色土層で、やわらかい。第II層もやはり黒色土層であるが固くしまっている。60~70cm。第III層は30~40cmの暗黒褐土層で、この層の中位にアカホヤ(Ah)のブロックが入っている。第IV層は10~15cmの薄い黒色土層。第V層は黒褐色土層で、ローム

層への漸移層として把えることができよう。第VI層は20~30cm、第VII層は50~60cmの厚さで、共に褐色土層でその境界は不明瞭であるが、第VI層は第VII層に比較して軟質である。なお、第VII層の下位にスコリアが含まれている。第VIII層は10~15cmの黒褐色土層、第IX層は30~40cmの黄褐色土層で、中位に始良・丹沢パミス(AT)がブロックでみられる。ATの風化した土層と考えられる。第X層は15~20cmの黒色土層であり、AT下位の黒色帯に対比されよう。第XI層は黄褐色土層で、層の厚さは不明である。

石器群の包含は第VI層、いわゆるソフトローム層の上位約10cmの範囲に認められた。



第3図 上岩戸遺跡出土の石器群 1~12細石刃, 13槓状剝離の剝片, 14細石核, 15・16剝片, 17スクレイパー



上岩戸遺跡出土の石器群

3 資 料

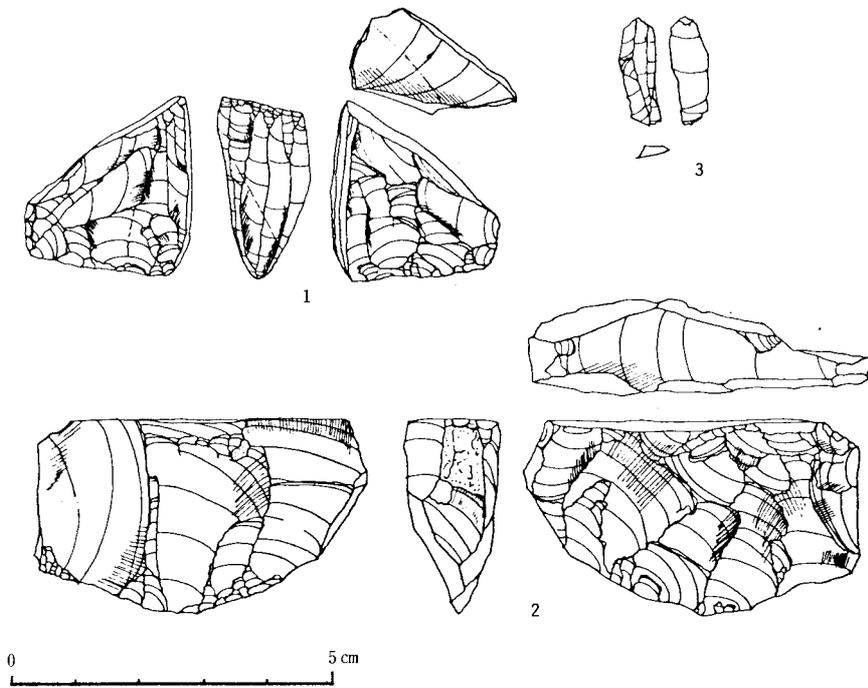
細石刃(1~12), 細石刃と考えられる資料が12点ある。1~7は第1地点での採集資料で, 8~12は第2地点での資料である。石材は黒曜石を主体にチャート, 流紋岩とバリエーションがあり, しかも黒曜石は半透明な良質なものと, 不透明で介雑物のあるものとの2種類が使用されている。完形品は3点のみで, 長さは17~22mmで, 幅は4~6mmとなっている。12は細石刃とするにはやや問題があり, 細石刃剥離作業のはじめの段階のものと考えられる。

槌状剥離の剥片(13), 片方の面に6面の槌状剥離が残されている剥片で, 細石刃剥離作業面を再生するために剥離されたものであろう。主要剥離面側の面に不規則な剥離が施されている。黒曜石製, 第1地点出土。

細石核(14), 舟底形に近い形の整ったチャート

製の細石核である。素材にはチャートの角礫を大きく分割したものをを用いている。細石核の打面は半割(?)した剥離面を利用している。一方の側面は打面からの調整剥離が行なわれているのに対し, もう一方の側面は半割される以前の大きな2つの剥離面がそのまま残されている。細石刃の剥離作業は短軸の一端で行なわれており, 剥離作業面に接する打面の一部に打面調整と考えられる小さな剥離面が認められる。第2地点出土。

剥片(15・16), 第2地点において10数点の不定形の剥片が採集されており, 石材は介雑物のある黒曜石である。15は大きな平坦打面をもつ縦長の剥片で, 背面には剥離方向の異なる2つの大きな剥離面と1つの自然面がみられる。16は長さと同幅がほぼ等しい剥片で, 背面には自然面とそれに主要剥離面と異なる方向の剥離面から



第4図 政所馬渡遺跡の石器群

1 細石核, 2 細石核ブランク, 3 細石刃

なっている。

スクレイパー(17), 比較的大形で厚味のある流紋岩の剥片が素材に用いられている。2次加工は両方の側辺に沿って集中的に施されて、鋭利な刃部を形成している。主要剥離面の大部分には節理面が残されている。上端の1部が欠損しているが、典型的スクレイパーである。第1地点出土。

4 上岩戸遺跡の石器群の様相

上岩戸遺跡では第1地点・第2地点から40点ほどの石器類が出土している。それらの代表的なものは図示したように、細石刃・細石核それにスクレイパーであり、上岩戸遺跡の石器群は細石器文化の所産と考えられる。しかも、第2地点における石器群はソフトローム層中の上位10cmほどの地層から採集したものであり、層位

的にも肯定できるものである。上岩戸遺跡の細石器文化の石器群の特徴を抽出するには、資料的な制約があるがいくつかの特徴を見出すことは可能であろう。

大野川流域における後期旧石器時代の石器群の石材としては、流紋岩が卓越しており、細石器文化の石器群についても同様な傾向がみれる。ところが、上岩戸遺跡では流紋岩よりもむしろ黒曜石の方が多く用いられ、それにチャートも使用されている。この石材の違いが、大野川の上流域という地理的な環境に起因するものか、あるいは、後期旧石器時代の終末という時間的なことによるものか、それとも両者に関連するものかという問題である。次に、細石核文化の特徴を端的に表わすものとみられるものに細石核の形態・製作技術がある。上岩戸遺跡出土の細石核は先の1点のみのため、これでその

特徴を述べるのは危険であることを承知で挙げてみたい。石材がチャートを用いていることも先に述べたように1つの特徴であろう。形態的には東九州の地域に顕著な「船野型細石核」に類似している。しかし素材の使い方や打面調整が行なわれることで異なっている。といて、西北九州に多く出土している舟底形の「福井型細石核」、また半円錐形の「野岳型細石核」のどちらのカテゴリーにも含めることができそうもないのである。そうなれば、全体的にみた時、やはり船野型細石核にもっとも近いものと見なさなければならないであろう。

第1地点で採集された1点のみごとなスクレイパーは、東九州あるいは大野川流域の船野型細石核に特徴的に共伴するスクレイパーと符合するものと考えられる。きわめて間接的であるが、特徴的なスクレイパーの存在することから船野型細石核で代表される細石器文化に含まれる可能性が示唆されているとみなすことができよう。

現在までのところ、大野川上流域の荻町で知られている細石器文化の遺跡としては、上岩戸遺跡のほかでは、政所馬渡遺跡の1ヶ所のみである。政所馬渡遺跡は昭和51年に発掘調査が実施され、縄文時代早期・前期の文化層の下層で無文土器を伴う細石器文化の包含層が確認された。採集資料を含めてわずか13点であるが、この中に、伊万里市腰岳産の黒曜石を用いた舟底形細石核と両面加工のブランクがみられる。この資料は形態的にも技術的にも福井型細石核と呼べるものである。13点の石器類の石材は黒曜石のほか、桂化木とメノウが使用されており、流紋岩はまったく認められないのである。

大野川の流域において、これまでに確認されている細石器文化の遺跡は15～16カ所を数えることができる。その多くは大野川中流域においてであり、しかもこの中流域の細石器文化は流紋岩製の「船野型細石核」と定型的なスクレイパーで特徴づけられる。これに対して大野川の下流域や上流域では、流紋岩以外の石材——黒曜石・チャートなど——を使用した細石核・細石刃その他の石器が発見されている。細石核も船野型とは異なるものが存在し、むしろ「福井型細石核」に近似している。このように石材や細石核の形態・製作過程の違いは、大野川流域における細石器文化の時間的な推移のあることを予想させるのである。

今回、報告を行なった上岩戸遺跡は、中流域に顕著な細石器文化と類似している点と異なっている点の両方がみられる。また、同じ上流域の政所馬渡遺跡のそれとも同様な2つの様相がうかがえる。しかしながら、上岩戸遺跡と政所馬渡遺跡の時間的な関係では、細石核の形態、土器の共伴の有無などから、上岩戸遺跡の時期は政所馬渡遺跡に先行するものと考えられる。

上岩戸遺跡の調査および資料を紹介するにあたって、荻町の山村高啓氏をはじめ、別府大学史学科考古学専攻生の協力を得た。心よりお礼を申し上げるしだいである。

主要参考文献

- 橘昌信「九州地方の細石器文化」駿台史学 47 (1979)
賀川光夫・他「政所馬渡遺跡」別府大学付属博物館 (1982)
荻町教育委員会「荻台地の遺跡」(1982)